

I 研究について

1 はじめに

(1) 学校の概要

本校は、南相馬市原町区の最南端、福島第一原子力発電所から北北西約21kmの地点に位置する学校である。

東日本大震災では、幸い津波の被害こそ受けなかったが、その後の原子力発電所の事故（以下「原発事故」という。）による放射線の影響で、一時は本校を離れ、鹿島区八沢小学校、その後原町区大甕小学校で学習をし、平成24年1月ようやく本校校舎に戻ることができた。また、学区の一部は居住制限区域及び避難指示解除準備区域（平成28年7月解除）となり、150名近くいた児童も1/3近くに激減した。

(2) 放射線教育について

【学校として】

現在、福島第一原子力発電所は廃炉作業が推し進められているが、万が一、再び事故が起きれば、本校へのさらなる被害が予想される。そのため、放射線への正しい理解を深め、どのように身を守るのか、どのように地域とともに歩んでいくのか等、より具体的で実践的な学びが必須となっている。

【授業実践として】

重点実践事項「たくましく生きるための健康や体力の増進」に放射線教育を位置付け、学級活動を中心に、全学年、発達段階を踏まえた系統性のある指導を行っている。しかし、知識の定着を中心とした学習内容となっており、児童が体験的な活動を通して、主体的に課題を解決していく学習までは至っていない。また、学級活動と他教科等との関連が希薄で、単発的な学びになっている。

【地域として】

平成30年12月、学校給食に市産米使用、平成31年3月、校庭の除去土壌搬出作業終了等、放射線の影響が少なくなり、地域内の線量についても低値で落ち着いているため、学校評価保護者アンケートにおいて、約6割が「特に不安はない」と答えている。このように地域全体として、放射線に対する意識が薄らいできているのが現状である。

しかしながら、危機に対する備えという観点から、今まで以上に関係団体との連携を深め、児童の学びを地域・家庭へ積極的に発信し、地域全体で安全への意識の高揚を図っていく必要がある。

2 目標

(1) 放射線教育の目標

放射線等に関する基礎的な知識を身に付けるとともに、放射性物質を体に取り込まない方法や身を守る方法を自ら考え判断しながら、実際に行動することができるようにする。

身の回りで起こっている放射線に関する問題、また、現在行われている復興への取組を基に、地域社会の一員として、安心・安全な社会の実現に貢献しようとする態度を養う。

(2) 目指す児童像

低学年	○ 放射性物質の存在が分かり、外部被ばく等、それらに気を付けて生活できる児童
中学年	○ 放射線の性質を知り、外部被ばく・内部被ばくをしないように注意しながら心身の健康を守ることができる児童
高学年	○ 身の回りの放射線量を知り、身体への影響に気を付けながら心身の健康を守ることができる児童 ○ 放射線による風評被害やいじめ問題等を理解し、自分でできることはないかを考え、実践しようとする児童

(3) 目指す教師像

- 放射性物質について深い理解をもち、科学的根拠を基にした客観的な立場から指導ができる教師
- 体験的な活動を通して児童が自ら考え、解決し、発信していく学習を積極的に展開していく教師

3 放射線教育の実践に向けて

(1) 指導内容

低 学 年	中 学 年	高 学 年
<ul style="list-style-type: none"> ○ 放射線、放射性物質の存在を知る。 ○ ホットスポット等に近づかないような生活の仕方を知る。 ○ 放射性物質が一度に大量に放出されたときの避難の仕方を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 放射線の性質を知る。 ○ 外部被ばくや内部被ばくをしないための生活の仕方を考える。 ○ 放射性物質が一度に大量に放出されたときの避難の仕方を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 身の回りの放射線量を測定し、どのように気を付けて生活するかを考える。 ○ 放射線に関する風評被害やいじめ問題等を知り、どのように解決すればいいか考える。 ○ 放射性物質が一度に大量に放出されたときの避難の仕方を知る。

(2) 課題解決のための手だて

【学校・地域から見えてきた課題】

- 本校は、福島第一原子力発電所より約21kmに位置しているため、より具体的に実践的な学びが必要である。
- 知識の定着を中心とした学習が主であり、単発的な学びになっている。
- 地域全体として、放射線に対する意識が薄らいできている。

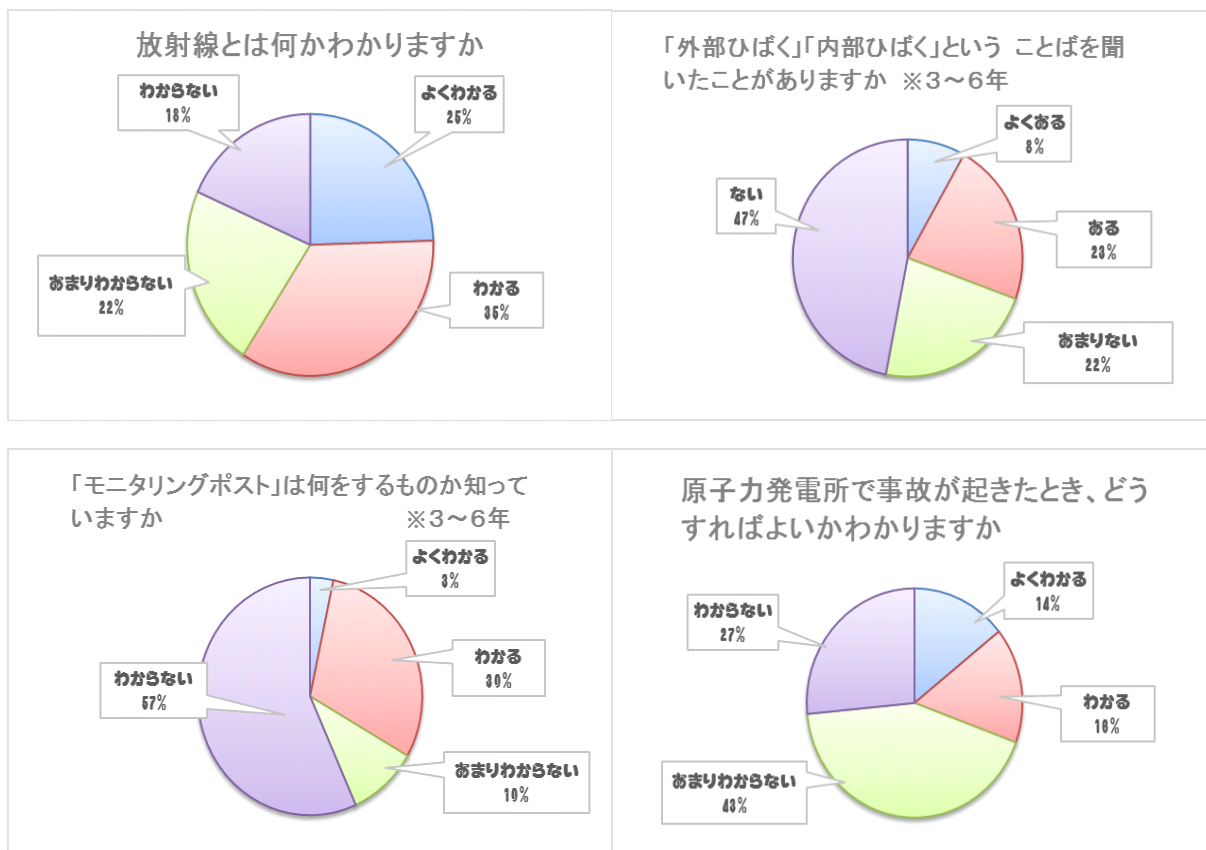


手だて

- 放射線教育コーディネーターを中心とした校内体制を組織し、系統的な指導を展開することにより、学びの積み上げを図る。
- 放射線教育と各教科等との関連を明確にした、教科等横断的な指導計画を策定する。
- 学級活動に5時間、放射線教育を位置付け、学習段階を「原発事故を知る・放射線を知る」「体験する・どうすればいいか考える」「学んだことを発信する」の3ステップ式にする。
- 関係団体との連携を深め、体験的な学習、実践的な学習の積極的な展開を図る。
- 児童の学びを地域・家庭へ積極的に発信し、地域全体で安全への意識の高揚を図る。
- 原発事故を想定した避難訓練・引き渡し訓練を実施する。



【児童の実態から見えてきた課題】



- 児童は震災時に幼少期、または震災後に出生したため、原発事故や放射線に関する問題について、詳しい知識をもたずに入学してくる。
- 1年生からの放射線教育を通して、その特質や健康被害について理解をしてきているが、どのようにすればよいか等、具体的な行動を起こすには至っていない。
- 放射線に関する問題が少なくなったため、年々、放射線への関心が低くなり、安全な生活を過ごすという意識が低くなってきている。



手だて

- 福島第一原子力発電所の事故を理解させ、放射線教育の学習を自分事として捉えられるようにする。また、復興への取組を理解させ、未来に向けた思いをつなげられるようにする。
- 関係団体との連携の下、自分たちの実生活と関連させた放射線教育の展開を図り、児童が自ら考え、判断し、行動できる力の育成を目指す。
- 自分たちの学びをまとめ、目的意識を明確にしながらか地域・家庭へ積極的に発信できるようにする。

II 研究の実際について

<校内における各学年の実践>

1 第6学年の取組

- (1) 「風評被害について知ろう」
※IV資料2放射線教育年間計画 **1**

令和元年7月4日(木) 3・4校時
指導者：熱海 佑一郎
講師：鳥取大学 北実 様
授業協力：環境再生プラザ

- ① 学級活動(2)ウ 心身ともに健康で安全な生活態度の形成
- ② 授業のねらい
放射線による風評被害について専門家の先生の講義を聞き、県内の風評被害の現状を理解する。
- ③ 授業の内容
鳥取大学の北実先生を講師に招き、「放射線ってどんなもの？」をテーマに、放射線の体への影響や原発事故、除染、風評被害について講義をしていただいた。専門家の立場から、放射線に関する詳細な説明をしてもらい、原発事故や放射線についてさらに理解を深めることができた。また、一つ一つの話真剣に聞く児童の様子が見られた。
風評被害についての話では、日本では県内の米の全量全袋検査や世界的に見ても厳しい食品の安全基準の検査が行われているにもかかわらず、福島県産の食品のイメージについて「安全性に不安がある」とするアンケート調査が示された。県内の放射線による風評被害の現状について理解するとともに、放射線について正しい情報を発信する必要性に気付くことができた。
そして、担任が風評被害の例題を提示し、自分ならどのように答えるのか児童に考えさせた後、グループで話し合う活動を行った。風評被害を自分事として捉え、これまでの学習を基に県内の現状や取組を発信する力の育成を図った。
- ④ 学習の様子



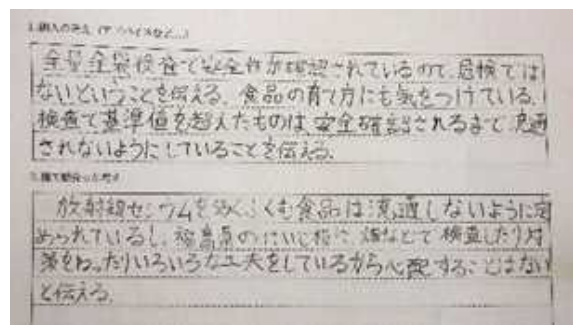
【北実先生による講義】



【身の回りにある放射線を測定】



【ワークシートに自分の考えをまとめる】



【児童の感想】



【自分の考えを基にしたグループでの話し合い】



(2) 「風評被害について話し合おう」
 ※Ⅳ資料2放射線教育年間計画 **2**

令和元年11月29日(金) 5校時
 指導者：熱海 佑一郎
 講師：鳥取大学 北 実 様
 授業協力：環境再生プラザ

授業 テーマ	放射線の影響と自分たちの生活との関わりに関心を持ち、風評被害を解消するために自分たちができることを友達や地域の人と話し合うことで、風評被害解消に向けて発信したい内容を考えることのできる授業
-----------	--

- ① 題材 「風評被害について話し合おう」
 学級活動(2)ウ 心身ともに健康で安全な生活態度の形成

② 題材について

本校では放射線教育の目標を、「放射線等に関する基礎的な知識を身に付けるとともに、放射性物質を体に取り込まない方法や身を守る方法を自ら考え判断しながら、実際に行動することができるようにする。」「身の回りで起こっている放射線に関する問題、また、現在行われている復興への取組を基に、地域社会の一員として、安心・安全な社会の実現に貢献しようとする態度を養う。」と設定し、全学年で学級活動の時間に、発達段階を踏まえた系統性のある放射線の学習を行っている。震災、原発事故後、福島県、特に浜通り地域で生活する児童にとって、放射線についての学習は欠かすことのできない内容である。本題材を通して、放射線の利用や影響について、科学的な根拠や具体的な事実を基に考えたり判断したりできるようになることで、福島県に生きることの誇りをもつとともに、地震や台風を含め有事の際に自分で考え行動し、自他の生命を守る力を高めることができると考える。

指導に当たっては、①原発事故を知る・放射線を知る②体験する・どうすればいいかを考える③学んだことを発信するの3ステップ式で学習を進めていく。①の段階では、語り部さんから震災時の様子や原発事故による避難生活について、専門家の先生から放射線や除染、廃炉について話をしていただき、原発事故や放射線についてさらに深く理解できるようにする。②の段階では、各関係機関との連携、施設の活用を図りながら、体験的・実践的な学習を推し進めていく。また、原発事故による食べ物やいじめ等の風評被害を取り上げ、どのように解決すればよいか友達と話し合う。児童の実生活で起こり得る内容を設定し、問題意識を高めさせたい。話し合いの場面では、これまでの学習を踏まえて意見を述べ合うようにさせ、感情に左右されることなく放射線に関して科学的に思考、判断できるようにしていく。そして、風評被害を解消するために自分たちができることは何か友達や地域の人と話し合う。その際、今の自分たちの生活の現状を伝えることがより説得力のある発信となることに気付かせた上で、原発事故当時と現在の生活がどのように変わったかを中心に話し合わせる。グループで話し合ったことを全体の場で交流することで、多様な考えに触れて視野を広げられるようにし、次の発信へ生かすようにする。③の段階では、国語科との関連を図りながら、②で構想したことを基に風評被害解消に向けたパンフレットを作り、学びを発信する。地域や県外の方に作品を見てもらうことを伝え、児童が目的意識と相手意識をもち、主体的な実践になるようにしていきたい。

③ 授業テーマにせまるための手だて

手だて1 関係機関との連携・外部人材の活用

地域の方に風評被害で困っている話をしてもらうことで、問題を自分事として捉え、学習意欲を高められるようにする。また、自分たちの現状を伝えることが風評被害解消に向けてより説得力のある発信となることを捉えられるようにするために、専門家の先生や以前共同学習をした大学生の話聞く場を設ける。話し合いの中で、地域の方に震災・原発事故当時の事を教えてもらい、児童が原発事故当時と比べて現在の生活が放射線の影響をあまり受けることなく送れるようになったことを実感できるようにする。

手だて2 考えを交流する場の設定

どのような情報を発信するとよいか友達や地域の方と意見を交流することで、考えを広げたり、深めたりできるようにする。また、全体で他のグループや参観者の意見を聞く場を設け、パンフレット作りに生かすことができるようにする。

手だて3 学習コーナーの活用

風評被害解消に向けて、自分にできることは何か科学的な根拠や具体的な事実を基に考えることができるように、これまで学習してきた内容や関係資料を掲示しておく。

④ 評価

観 点	関心・意欲・態度	思考・判断・実践	知識・理解
評 価 の 内 容	放射線の利用や影響に関心をもち、風評被害解消に向けた話合いや実践に進んで取り組んでいる。	放射線に関する風評被害についてどのように解決すればいいのか考え、実践することができる。	原発事故、放射線の利用や影響と私たちの生活との関係について理解している。




⑤ 指導・評価計画（本時 4 / 5）


段階	時	学習活動	学習活動に即した評価規準（評価方法）		
			関心・意欲・態度	思考・判断・実践	知識・理解
① 知 る	1	語り部さんによる講話を聞く。（震災当時から現在について）	東日本大震災と原発事故で起きたことに関心をもっている。（振り返り）		原発事故や放射線の影響と私たちの生活との関係について理解している。（振り返り）
	2	放射線について専門家による講義を聞く。	放射線の利用や影響、今後の原発について関心をもっている。（振り返り）		放射線の利用や影響と私たちの生活との関係について理解している。（振り返り）
② 体 験 す る ・ 考 え る	3	風評被害について話し合う。	風評被害を解消するための話合いに進んで参加している。（活動の様子）	放射線に関する風評被害について、どのように答えればいいのか考えることができる。（発言・ワークシート）	
	4 本 時	風評被害解消に向けて自分ができることを考える。	風評被害解消に向けて発信する内容について話合いに進んで参加している。（活動の様子）	風評被害解消に向けて発信する内容について考えることができる。（発言・ワークシート）	
③ 発 信 す る	5	風評被害解消に向けたパンフレットを作る。（国語科との関連）	風評被害解消に向けたパンフレット作りに進んで取り組んでいる。（活動の様子）	科学的な根拠や具体的な事実を基に風評被害解消に向けたパンフレットを作ることができる。（作品）	

⑥ 本時のねらい

風評被害を解消するために自分たちができることを友達や地域の人と話し合い、風評被害解消に向けて発信する内容を考えることができる。

⑦ 指導過程

学習活動・内容	時間	○指導上の留意点 □手だて ※評価
<p>1 風評被害について確認する。 ・ 今までの学習、地域の方の話</p>  <p>2 本時のめあてを捉える。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;"> <p>風評被害を解消するために発信する内を考えよう。(私たちの今)</p> </div>	5	<p>○ 風評被害を想起させる。 □ 地域の方に風評被害で困っている話をしてもらおうことで、問題を自分事として捉え、学習意欲を高められるようにする。(手だて1)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>地域の方に風評被害で困っている話をし ていただくことで、問題を自分事として捉 え、学習意欲を高めることができた。</p> </div> <p>○ 風評被害を解消するために、発信する内容を話し合うことを理解させる。</p>
<p>3 話合いの見通しをもつ。 (1) 大学生の話聞く。(手紙) (2) 専門家の先生の話聞く。</p> <p>4 風評被害解消に向けて、何を発信すればよいか話し合う。 (1) 安心・安全について</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 食べ物 <ul style="list-style-type: none"> ・ 給食で南相馬市産米が使われるようになってきていること。 ・ 家で栽培した野菜や果物を食べていること。 ② 放射線量、屋外活動制限 <ul style="list-style-type: none"> ・ 放射線量は事故当時と比べて低下していること。 ・ 制限なく外で遊べること。 ③ 居住制限 <ul style="list-style-type: none"> ・ 安全に登校できること。 ・ 太田に住むことができるようになったこと。 <p>(2) 未来へ向けた取組について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 新産業として、ロボットテストフィールドができたこと。 ・ 震災を乗り越えた相馬野馬追があること。  <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>保護者の方にもグループを作っ ていただき、風評被害解消に向け て、発信したい内容を話し合っ ていただいた。</p> </div>	5 25	<p>○ 風評被害解消への見通しを明らかにする。 □ 自分たちの現状を伝えることが風評被害解消に向けて説得力のある発信となることを捉えられるようにするために、専門家の先生や共同学習をした大学生の話聞く場を設ける。(手だて2)</p> <p>○ 自分の考えをワークシートにまとめ、思考を整理させる。 □ 発信する内容について科学的な根拠や具体的な事実を基に考えることができるように、これまで学習してきた内容や関係資料を掲示しておく。(手だて3)</p> <p>○ 「安心・安全」「未来へ向けた取組」を話合いの柱にする。 □ どのような情報を発信するとよいか、友達や地域の方と意見を交流し、考えを深めたり広げたりできるようにする。(手だて2)</p> <p>□ 話合いの中で、地域の方に震災・原発事故当時の事を教えてもらい、原発事故当時と比べて現在の生活が放射線の影響をあまり受けることなく送れるようになったことを実感できるようにする。(手だて1)</p> <p>※ 風評被害解消に向けて発信する内容についての話合いに進んで参加しているか。(活動の様子)</p> <p>○ グループで話し合ったことを模造紙にまとめて可視化する。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>発信したい内容についてグループで交流した。地域の方に震災・原発事故当時のことを教えてもらい、児童は現在の生活が放射線の影響をあまり受けることなく送れるようになったことを実感しながら、自分たちの考えを深めていった。</p> </div> 

<p>5 話し合ったことを交流する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 事故後は外で遊ぶことができなかつたけれど、今は体育や休み時間に外で活動することができる。 ・ 原発事故で無くなった産業があるけれど、未来に向かって新しい産業が作られている。  <p>6 専門家の先生の感想を聞く。</p>	<p>10 □ パンフレット作りに生かすことができるように、他のグループや参観者の考えを聞く場を設ける。(手だて2)</p> <p>※ 風評被害解消に向けて、発信する内容を考えることができたか。(発言・ワークシート)</p> <p>グループで話し合ったことを模造紙にまとめ、発表し合った。全体の場で他のグループや保護者グループの意見を聞き、パンフレット作りに生かすことができるようにした。</p> <p>○ パンフレットは県外や地域の人に見てもらふことを伝え、目的意識をもった意欲的な実践につなげられるようにする。</p>
---	---

⑧ 成果と課題

【全体を通して】

○ 地域の方や保護者の方に授業へ参加していただいたことで、地域とともに考えるという意識を強くすることができた。

● 放射線との関わりについて自分の考えを具体的に書くことができない場合が見られた。それだけ放射線への不安は無くなっていると考えられる。しかし、意識が低くなっている表れでもある。原子力発電所に近い地域であることから、他教科や行事との関連を図りながら意識を高めていきたい。

【手だて1 関係機関との連携・外部人材の活用】

○ 地域の方にゲストティーチャーとして授業に参加してもらった。導入では、地域の風評被害で困っている話をしていただくことで、身近に風評被害があることを意識し、問題をより自分事として捉えさせ、意欲的な学習につなげることができた。さらに、話合いの場面では、ゲストティーチャーが各グループに入り、児童の考えにアドバイスをしていただいた。児童とは異なる視点からの話で、児童が考えを深めるために効果的だった。

鳥取大学の北先生には、話合いの方向性の提示や話合い時に各グループに適切なアドバイスをしていただいたことで、児童は話合いの柱に沿って思考し、説得力のある発信内容を考えることができた。

○ 地域の方、保護者の方等、多くの方に参加していただき、授業のねらいに基づいた充実した授業を行うことができた。今後についても、授業の中心となる教師のコーディネート力を高めていきたい。

【手だて2 考えを交流する場の設定】

○ 話合いでは、互いの意見を友達や地域の方と交流させた。司会をする児童に事前に指導し、円滑に話合いを進めることができた。グループや全体で発表し合う場を設けたことで、児童は考えを広げたり、深めたりすることができた。

● 導入で時間がかかってしまい、話合いや意見の交流の時間が短くなってしまった。話し合う内容がたくさんあったので、自分の考えを前時までにとまとめておくよかった。

【手だて3 学習コーナーの活用】

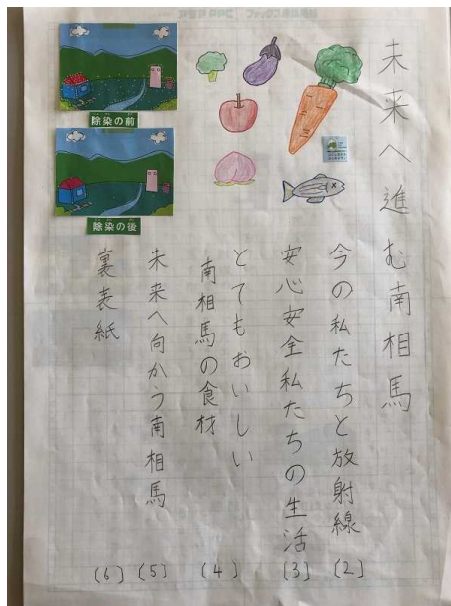
○ 学習コーナーを参考にしながら、放射線と自分たちとの関わりについて考える児童が見られた。

● 児童の考えがより深まるような学習コーナーとなるよう、内容の吟味と工夫を行っていく必要がある。

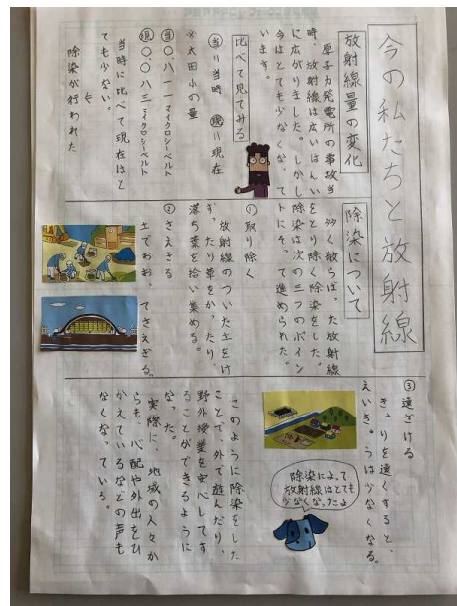
(3) 「風評被害解消に向けて、パンフレットを作ろう」
 ※Ⅳ資料2 放射線教育年間計画 3

令和2年2月10日(月) 5校時
 指導者：熱海 佑一郎

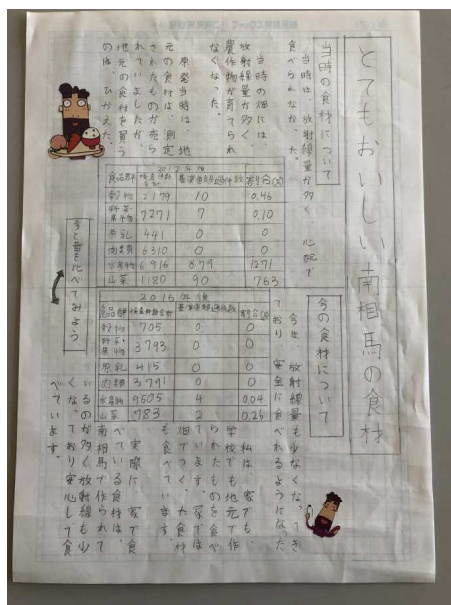
- ① 学級活動(2)ウ 心身ともに健康で安全な生活態度の形成
 国語科「町の良さを伝えるパンフレットを作ろう」
- ② 授業のねらい
 風評被害の解消に向けて、効果的な構成や材料の配置、記述を考えて編集し、パンフレット作りに取り組む。
- ③ 授業の内容
 風評被害解消に向けて話し合った「自分たちが安心して暮らしている現状」について、客観的な事実を中心にまとめ、2つのグループに分かれてパンフレット作りを行った。出来上がったパンフレットは家庭、地域、県内外へと段階に分けて配付する。



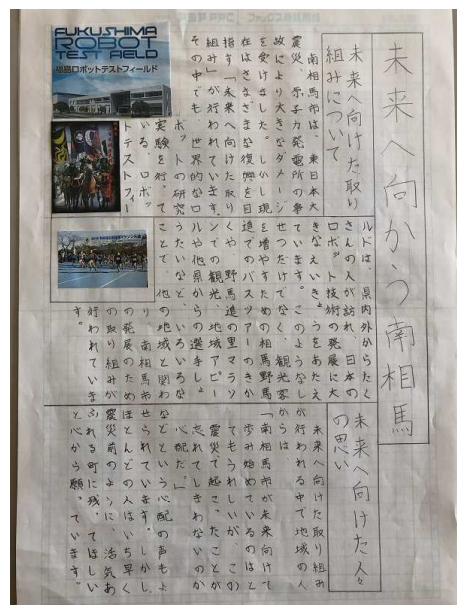
【パンフレットの原本】



【放射線量が低下したこと】



【地元の米や野菜がおいしく食べられること】



【未来へ向けた産業のこと】

<学校全体及び校外における実践>

1 原発事故を想定した引き渡し訓練 (全学年 行事)

※Ⅳ資料2放射線教育年間計画4

- (1) 日時：令和元年12月3日(火) 5校時
 (2) 実施目的

- ① 非常事態(地震、原発事故の恐れ)が発生した場合を想定し、正しい避難の仕方と避難経路を知り、生命を守るために児童自ら考えて行動できるようにする。
- ② 地震などの非常災害発生に際して、全職員の任務・分担を明確にし、実際の訓練を通して不慮の災害に備える。
- ③ 保護者への児童引き渡しを素早く確実に行えるようにする。

(3) 想定

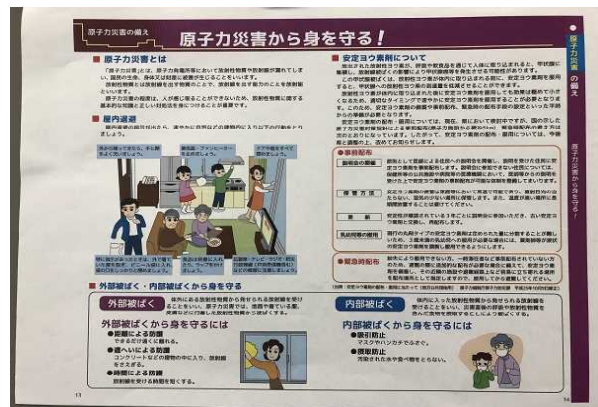
- ① 大地震発生
- ② 原発事故の恐れあり

(4) 実際の様子

- ① 大地震発生
 - ・机の下などに身を隠し、身体を守る。
- ② 福島第一原子力発電所の建物に被害があり、放射性物質が漏れ出す恐れがある。
 - ・放射線から身を守る行動をとる。
 - 〔窓を閉め、エアコンや換気扇を切る。〕
 - 〔肌を出さないよう服装を整える。〕
 - 〔口を覆うものを準備する。〕
- ③ 福島第一原子力発電所から放射性物質が漏れ出す危険はない。
- ④ 地震により校舎に被害が出ているため、校庭へ避難する。
- ⑤ 保護者への引き渡しを行う。



【防災ヘルメットをかぶり校庭へ避難】



【南相馬市「原子力災害から身を守る」】



【校庭への避難完了】



【保護者への引き渡し】

2 コミュニティ福島への体験学習（3～6年生 社会・理科）

※IV資料2放射線教育年間計画 **5**

(1) 日時：5・6学年…令和元年11月6日（水）10:00～13:30
3・4学年…令和2年2月7日（金）10:00～13:30

(2) 実施目的

- ① 東日本大震災及び原発事故、そして放射線災害に関する展示を見学することで、過去から現在に至る福島県の現状について理解を深めることができる。
- ② 放射線に関するワークショップに参加し、放射線の性質や健康被害などについて理解することができる。

(3) 実際の様子

① 見学学習

- ・ ふくしまの3.11から
- ・ ふくしまの環境のいま
- ・ 放射線ラボ
- ・ 環境創造シアター



【原発の模型で事故の概要を知る】



【太田小の放射線量の説明を受ける】

○ 体験学習

- ・ 放射線の遮蔽実験（5・6学年）



【放射線は遮へいできるのかを考える】



【実際に実験をしてみる】

- ・ 原子力発電に変わるクリーンエネルギーの実験（3・4学年）



【太陽光エネルギーを利用した実験】



【自分の考えをまとめる】

3 教育講演会

※IV資料2放射線教育年間計画⁶

演題 「小学校での放射線教育の必要性」

講師 東北大学災害科学国際研究所 教授 千田 浩一 様



(1) 日時：令和元年11月29日（金）14：50～16：10

(2) 参加者 本校授業研究会参会者 教職員 保護者
老人クラブをはじめとする地域の方々 等

(3) 内容

- 東日本大震災及び原発事故から8年がたったが、復興の大きな妨げとなっているのが放射線の風評被害である。
- 多くの人々が放射線に対して多くの誤解をもっており、風評を防止するためにも放射線の基礎知識の普及が喫緊の課題である。
- 小学校の段階から放射線教育を充実させ正しい知識を得ることが重要であり、保護者や高齢者についても放射線に関する正しい知識が必要である。

4 ロボットテストフィールド見学学習（5・6学年 総合的な学習の時間）

※IV資料2放射線教育年間計画⁷

(1) 日時：令和元年10月7日（月）10：00～11：30

(2) 実施目的

- 福島第一原子力発電所の廃炉作業が進む中、地域の新産業の概要を知り、復興へ向けての取組を理解する。

(3) 実際の様子



【施設を見学する様子】



【ドローンの体験】

Ⅲ 成果と課題について

1 成果

- 放射線教育と各教科等の関連を明確にした年間計画を策定し、指導事項を「知る」「体験する」「発信する」の3つに分けた段階的な指導を目指したことで、各学年間の内容の系統性・発展性が明らかになり、児童のより広がりのある学び、より深い学びにつながった。
- 震災時に幼少期、または震災後に出生という児童の実態を踏まえ、東日本大震災から原発事故、そして復興に向けての取組という一連の流れを大切にして、発達段階に応じた体験的・実践的な指導を展開した。今まで何気なく聞いていた「放射線」や「原発」といった言葉を確かな知識・理解とし、各問題を自分事と受け止めて考えたり行動したりできるようになった。
- 南相馬市役所、環境再生プラザを中心とした関係機関との連携を深めるとともに、コミュニティ福島や福島ロボットテストフィールド等の施設を積極的に利用することで、専門的な指導による質の高い授業実践が可能となった。また、実際に指導する本校教員についても、豊富な教材や資料、実践的な機器などを活用することができ、様々なアドバイスをいただいたことで、指導力の向上につながった。
- 地域の方や保護者の方等、多くの方が授業に参加し、過去の状況から現在に至るまで、様々な視点から説明をいただいたり、資料をいただいたりした。児童は、改めて自分たちが地域の一員として生活していることを実感したとともに、これから自分に何ができるか等を深く考えるきっかけとなり、地域への愛着を高める一因となった。
- 今年度、初めて原発事故を想定した避難・引き渡し訓練を実施した。南相馬市作成による「原子力災害が起こったら…」「原子力災害から身を守る！」を基にしながら、放射線から身を守るためにどのように行動したらよいかを実践を通して学ぶことができた。来年度以降も継続して実施していくことで、自ら考え判断し行動できる児童の育成を目指していきたい。

2 課題

- 放射線教育の実践について、各種便りやHP等で広く情報発信をし、11月には保護者・地域の方が参加する授業を全学年で行った。参加された方々には、放射線教育の意義やその必要性をご理解いただけたが、ごく限られた方の参加に留まるなど、地域全体として放射線に対する意識を高めるまでには至らなかった。
- 放射線教育への取組や児童の学習の様子等、今後も継続的に情報発信を行い、保護者・地域へ啓発を図るようにする。さらに、児童からの発信をより重要視して、一番身近な家族から地域へ、そして他県へと段階的な発信体制を整え、相互の交流をより活発化できるようにする必要がある。

